

ノート

ハンガリー語およびフィンランド語の学習教材

渡辺 克義

山口県立大学国際文化学部

Hungarian and Finnish textbooks, dictionaries etc. published so far in Japan

Katsuyoshi WATANABE

Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

キーワード：入門書、学習書、読本、会話集、辞書

1. ハンガリー語学習教材

近年わが国でもハンガリー語教材がかなり増え、学習環境は飛躍的に改善されている。

ここでは、本邦で刊行されたハンガリー語学習教材を概観する。

これまでに刊行された主な書籍（洋書3点を含める）は次のとおりである。

●入門書・学習書

今岡十一郎 1978『新稿改訂版ハンガリー語四週間』大学書林

浅津・ケステーシュ・エルジェーベト、岩崎悦子 1987『ハンガリー語I』大学書林

早稲田みか 1989『エクスプレスハンガリー語』白水社

早稲田みか 1995『ハンガリー語の文法』大学書林

浅津・ケステーシュ・エルジェーベト、岩崎悦子 1997『ハンガリー語II』

岩崎悦子 2000『中・東欧のことばをはじめましょうハンガリー語』朝日出版社

早稲田みか 2001『ハンガリー語の入門』白水社

岡本真理 2002『語学王ハンガリー語』三修社

大島一 2009『ハンガリー語のしくみ』白水社

岡本真理 2010『まずはこれだけハンガリー語』国際語学社

早稲田みか、バルタ・ラースロー 2011『ニューエクスプレスハンガリー語』白水社

岡本真理 2013『世界の言語シリーズ 8 ハンガリー語』大阪大学出版会

●読本

岩崎悦子訳注 1985『ハンガリー短篇集 (I)』大学書林

岩崎悦子訳注 1990『ハンガリー短篇集 (II)』大

学書林

●会話集

浅津・ケステーシュ・エルジェーベト、岩崎悦子 1981『ハンガリー語会話練習帳』大学書林

江口清子 2003『ことたびハンガリー語』白水社

岡本真理 2003『らくらく旅のハンガリー語』三修社

横山昇 2003『旅の指さし会話帳49 ハンガリー語』情報センター出版局

●語彙集・辞書

岩崎悦子、浅津・ケステーシュ・エルジェーベト 1985『ハンガリー語基礎1500語』大学書林

今岡十一郎 2001『ハンガリー語辞典』大学書林

今岡十一郎 2009『簡約ハンガリー語辞典』大学書林

早稲田みか、岡本真理、バルタ・ラースロー 2012『ハンガリー語単語集』白水社

●洋書

Kassai, Georges&Szende,Thomas 1996. *Hungarian with Ease*. Chennvières-sur-Marne Cedez, France: ASSiMiL.

Rounds, Carol H.&Sólyon, Erika 2002. *Colloquial Hungarian: The Complete Course for Beginners (Colloquial Series)*. London, UK: Routledge.

Pontifex, Zsuzsa 2011. *Complete Hungarian with Two Audio CDs: A Teach Yourself Guide (Teach Yourself Language) [Audiobook]*. London, UK: McGraw-Hill.

●その他

徳永康元『片目考徳永康元言語学論集』（汲古書院、2010年）

では次にやや詳しくこれらの本をみていきたい。

入門書・学習書

今岡 (1978) は、わが国のハンガリー研究の草分けである今岡十一郎 (1888 - 1973年) の手になる語学入門書である。今岡 (1978) の旧版が刊行されたのは1952年であるが、旧版にしる新稿改訂版にしる、旧式な教本であることには変わりなく、学習はしづらい。同書には音声資料の類はない。しかし、現在50歳以上の邦人ハンガリー研究者で本書を手にとることがまったくなかったという人は皆無であろう。本邦におけるハンガリー語学習書といえば『四週間』のみという時代が30年以上も続いたのであった。

浅津・岩崎 (1987) の刊行により、本邦の学習書の数も複数となり、選択の余地が生まれた。浅津・岩崎 (1987) には別売カセットテープがあり、音声を耳でも確認できるようになった。本書は優れた教材ではあるが、中身が本格的であることから、学習は容易ではない。「文法」の欄で、ハンガリー語の文例の後に和訳がないこと、文法索引や語彙索引がないことが惜まれる。しかし、豊富な練習問題は本書の存在価値を高めている。浅津・岩崎 (1987) の刊行から10年の歳月を経て、待望の浅津・岩崎 (1997) [同じく別売カセットテープあり] が上梓された。浅津・岩崎 (1997) には語彙索引があり、浅津・岩崎 (1987) の語彙も合わせて収録されている。以上の2冊を仕上げれば、基本文法のすべてと相当数の語彙 (約5千語) が習得できる。しかし、それには非常な努力が学習者に求められる。著者はこう記している。「本書がくむずかしすぎる」と言っ、著者たちを責める人には、ハンガリー人は、このように書くだけでなく、このように話すのだと答えましょう。旅行に必要な会話を超えて、書いたり、話したりの形でハンガリー人とコミュニケーションを持ちたいと考えるなら、本書において提供された知識が必要です」 (浅津・岩崎 (1997, iii))。ここには著者の矜持も見えるが、利用者の側からは反論すべき言葉も見つからないだろう。

早稲田 (1989) は、浅津・岩崎 (1987) が刊行されて浅津・岩崎 (1997) が出るまでの間に上梓された。早稲田 (1989) はコンパクトな一冊 (全20課) で、利用語彙も多くないが、基本文法が要領良くまとめられた優れた書である。それだけに、逆に、詰め込み過ぎのきらいがないでもない。とくに、第4課で名詞・形容詞の複数が出るあたりは、説明が簡潔なだけに、急に難度が高まったような印象を与える。しかし、ここをなんとか乗り切り、第7課で現れる定活用を克服すれば、あとは最後まで一気に学べるであろう (以上は、評者自身の体験に基づく)。

早稲田 (1989) はカセットテープが別売となっていたが、2005年に同じ内容のまま『CDエクспレスハンガリー語』となり、利便性が増した。

早稲田 (1995) は参照文法として利用できるが、既に基礎力がある人には、最初から丁寧に学習し、文法の整理に役立てることも可能である。

岩崎 (2000) は全10課からなる小冊子 (106頁) である。文法項目を網羅的に学ぶことはできないが、他の入門書・学習書を終了後に目を通せば、別のアングルからの語彙・表現の拡充がはかれる。岡本 (2002) [2006年に『ゼロから話せるハンガリー語——会話中心』と改題]、岡本 (2010) でハンガリー語に入門することも可能だが、私見では、岩崎 (2000) に関して述べたのと同じような利用法が望ましいのではないかと思う。

早稲田 (2001) は学びやすいテキストである。テキストは全25課、286頁から成り、ゆっくりとしたペースで豊富な練習問題をこなしながら、基礎文法のすべてと2千語近くの語彙を覚えることができる。著者は「本書の使い方」(4頁) で次のように記しているが、至言である。「始める前にまず、CDを聞いてみてください。耳を澄ませてハンガリー語の響きを感じてください。意味をもたない純粋な音の羅列としてのハンガリー語は、あなたの耳にどのように響きますか? やがて、それが意味をもち始めます。ハンガリー語の響きを音そのものとして楽しむことができるのは、まだハンガリー語を何も知らない今しかありません!」早稲田が指摘するように、ある外国語を学ぶということは、その外国語を音楽的に鑑賞することができなくなるということでもある。評者の場合、まだまだハンガリー語の響きを楽しむ余裕がある。仮にその楽しみが奪われたとしても、世界には音楽的に楽しむ余地のある言語が優に6千言語はあるだろう。ハンガリー語を学ぶことで奪われるものを心配する必要などまったくなさそうだ。

大島 (2009) は、ハンガリー語をまだ学んでいない人にも有益だが、学習がかなり進んだ段階の人にとっても、この言語をめぐる補完的知識が得られるので、価値がある。

早稲田・バルタ (2011) は、早稲田 (1989) よりかなり学びやすくなった。文法事項に大きな量的違いはないが、詰め込み過ぎとの印象がない。早稲田・バルタ (2011) には、早稲田 (1989) にはなかった、「単語力アップ」「表現力アップ」「歌で単語力・表現力アップ」「ナレーターメッセージ」が収められている。

岡本 (2013) は優れたテキストであるが、独習者向きではない。教師の存在を前提とした教科書の一冊と言っているだろう。本書に関しては、テキスト

の録音者が4人もいてヴァリエーションがあること、29ものコラム記事があり学習者のモチベーションが保たれるような工夫がされていること、テキストの内容が実用的であること——以上のような長所がすぐにあげられる。評者は、「分野別用語集」に最大の評価を与えたい。これにより、同一分野の語彙が一気に整理・習得でき、また本文記述の関係で抜け落ちていた重要語彙が補充される。ところで、評者は本書が独習者に向かないと断言したが、これは、各課に語彙一覧がなく、また、あとで学習する文法項目が多数なんの説明もなく先の課に現れるからである。後者の点は、テキストがナチュラルなものになるメリットを勘案しても、やはりマイナスであろう。しかし、独習者でも2度、3度と本書を繰り返し学ぶなら、おのずと問題は水解するであろう。

読本

岩崎訳注(1985)、岩崎訳注(1990)は、文法を終え、一定の語彙を身につけた学習者が取り組むべきテキストである。岩崎訳注(1985)では10作家10作品が、岩崎訳注(1990)では10作家11作品(エルケニ・イシュトヴァーンのみ2作品)が収められている。残念なことに、注釈はあまり詳しくない。

会話集

会話集はそれぞれにメリットがある。浅津・岩崎(1981)〔別売カセットテープ〕と江口(2003)〔CD付き〕には音声資料がある。江口(2003)には文化的な解説もあり有益である。岡本(2003)と横山(2003)には音声資料はないが、持ち運びには適当である。横山(2003)の第3部「日本語→ハンガリー語単語集」・第4部「ハンガリー語→日本語単語集」は貴重である。

語彙集・辞書

今岡(2001)とそれをコンパクトにした今岡(2009)は、用例に乏しく、文法記述もなく、新語の記載もない、などの理由から、実用的とは到底言えない。語彙集ではあるが、岩崎・浅津(1985)や早稲田・岡本・バルタ(2012)の方がはるかに使い勝手がいい。用例が潤沢にあり、文法情報が具備された洪和辞典を編纂する人はいないであろうか。できることなら、和洪辞典の刊行も検討していただきたいものである。

洋書

洋書店や Amazon.com など簡単に入手できる3点を取りあげる。Kassai&Szendé(1996)で読まれるハンガリー語はテンポが遅く、いかにも学習用という感じがするが、Rounds&Sólyon(2002)と

Pontifex(2011)の録音はナチュラルに響く。これらのテキストは、本邦で出ている学習書で学んだ後に、復習用教材として利用できるだろう。

その他

徳永(2010)はわが国のハンガリー語学の碩学の論文をまとめたものである。語学エッセイ的なものに加え、本格的論考も含まれるので、どの章も読みやすいとは言いかねる。徳永康元(1912-2003年)と言えば、名エッセイストとしても知られ、その三部作(『ブダペストの古本屋』〔恒文社、1982〕、『ブダペスト回想』〔恒文社、1989〕、『ブダペスト日記』〔新宿書房、2004〕)は、ハンガリーに関心を寄せる者にとって必読書となっている。

以上、本邦で刊行されたハンガリー語学習書を概観したが、急務なのは、やはり辞書の編纂であろう。大阪大学外国語学部(旧大阪外国語大学)にハンガリー語専攻が設けられてからまもなく四半世紀になろうとする。留学も一般的となり、高いハンガリー語運用力を持つに至った邦人も少なくない。旗振り役が現れれば、優れた辞書の編纂も可能ではなからうか。

2. フィンランド語学習教材

筆者は1993年12月初めから翌年3月末までの予定でフィンランド政府給費奨学生としてヘルシンキ大学での留学に赴いた。わずか4ヵ月という短い期間であるが、現在でもフィンランド政府給費奨学生の留学期間は3ヵ月~9ヵ月と短く、しかも原則として期間延長は認められていない。拙文の筆者の場合、最終的には1994年8月末まで延長を認めてもらったが、それ以降の滞在は不可とされた。当時のフィンランドは未曾有の不況下にあったことから、同国の決定を肯んじないわけではないが、至極残念であった。フィンランド研究にフィンランド語は不可欠であるが、この言語の習得は容易ではなく、一定の運用能力を獲得するまでに非常な努力とある程度の時間を要する。後進のためにもフィンランド政府にはせめて2年程度の留学期間は認めていただきたいと思う。9ヵ月ではあまりに短いと言わざるをえない。各年の募集人員を減らしてでも、一人当たりの留学期間を延ばし、少数ではあっても真に有為な研究者を育てたほうが得策ではなからうか。フィンランド政府にはぜひご一考いただきたいものである。

さて、それはともかく、ここでは本邦のフィンランド語学習環境を、市販されているテキストの面から眺めていきたい。近年、わが国のフィンランド語教材の数は大幅にふえ、学習環境は大幅に改善された。これまでに刊行された主な書籍(洋書2点を含

める)は次のとおりである。

●入門書・学習書

- 尾崎義 1952『フィンランド語四週間』大学書林
小泉保 1983『フィンランド語文法読本』大学書林
松村一登 1986『エクスプレスフィンランド語』白水社
荻島崇 1992『基礎フィンランド文法』大学書林
栗原薫、マルユットゥ・コウリ 2002『フィンランド語が面白いほど身につく本』中経出版
佐久間淳一 2004a『フィンランド語のすすめ初級編』研究社
佐久間淳一 2004b『フィンランド語のすすめ中級編』研究社
千葉庄寿 2006『語学王フィンランド語』三修社
稲葉千晴 2006『まずはこれだけフィンランド語』国際語学社
吉田欣吾 2007『フィンランド語のしくみ』白水社
吉田欣吾 2010『フィンランド語文法ハンドブック』白水社
吉田欣吾 2013『フィンランド語トレーニングブック』白水社
山川亜古 2013『ニューエクスプレスフィンランド語』白水社

●読本

- 荻島崇 1991『やさしいフィンランド語読本』大学書林
アンニ・スヴァン(荻島崇訳注)1994『フィンランド語童話選アンニ・スヴァン作品集より』大学書林

●会話集

- 庄司博史 1987『フィンランド語会話練習帳』大学書林
青木エリナ 2002『旅の指さし会話帳35 フィンランド語』情報センター出版局
山川亜古 2004『らくらく旅のフィンランド語』三修社
上山美保子(編集・企画)2009『絵を見て話せるタビトモ会話 フィンランド フィンランド語+日本語・英語』JTBパブリッシング

●語彙集・辞書

- 荻島崇 1983『フィンランド語基礎1500語』大学書林
荻島崇 1997『フィンランド語辞典』大学書林
荻島崇 2000『フィンランド語日本語小辞典』大学書林
荻島崇 2005『日本語フィンランド語辞典』大学書林

- 荻島崇 2008『日本語フィンランド語小辞典』大学書林
稲葉千春、ピーア・マティライネン 2010『すぐにつかえる日本語・フィンランド辞典』国際語学社

●洋書

- Leney, Terttu2010.*Complete Finnish with Two Audio CDs: A Teach Yourself Guide (Teach Yourself Language) [Audiobook]*. London, UK: McGraw-Hill.
Abondolo, Daniel2012. *Colloquial Finnish: The Complete Course for Beginners (Colloquial Series)*. London, UK: Routledge.

●その他

- 稲垣美晴 1981『フィンランド語は猫の言葉』文化出版局
稲垣美晴 1987『注文の多い翻訳家』筑摩書房
吉田欣吾 2008『「言の葉」のフィンランド — 言語地域研究序論』東海大学出版

では次にやや詳しくこれらの本をみていきたい。

入門書・学習書

尾崎(1952)はわが国で初めて刊行されたフィンランド語学習書である。今日から見ると、いろいろと不備もあるが、画期的な一冊であることは間違いない。小泉(1983)が現れるまで、書店で目にするフィンランド語学習書といえば、尾崎(1952)があるのみであった。現在50歳以上のわが国のフィンランド研究者で尾崎(1952)を手にすることがなかったという人は皆無であろう。

尾崎(1952)の「不備」とは、音声資料がないこと、記述が妙に理屈っぽいこと、などである。加えて、現在のフィンランド語の事情とかみ合わない記述も散見される。ともあれ、半世紀以上前の日本でこのレベルまでフィンランド語に精通した邦人がいたこと自体が率直に驚きである。残念なことに、評者は尾崎(1952)では到底フィンランド語の基礎を終了することができなかった。当時(1982年5月に同書を購入)最も関心があったのは、フィンランド語がどのような響きを持つ言語であるかということだった。尾崎(1952)には音声資料がなかったので、発音の記述を読んでも音に関してはまったく想像するほからはなかった。やむなく、リングフォン・フィンランド語コースを、大枚をはたいて購入し(カセットテープ4巻とテキスト3冊で4、5万円はしたと記憶している)、どうにかフィンランド語の響きだけは感じるようになった。もっとも、このフィンランド語コースは独習用としては不向きで、その恩恵にあずかれるようになったのは、

数年後になる。

小泉(1983)は「読本篇」と「文法篇」の2部から構成されている。著者は「はしがき」で次のように記している。「フィンランド語を初めて学習しようとする方々は、まず「文法篇」の音声の章に目を通した上、「読本篇」を根気強く読み終えていただきたい。かなり早いテンポであるが、初級から中級までの実力を身につけると共に、この部分だけでもフィンランド文法の概要が見渡せるように配慮してある」(iii頁)。小泉が自ら設定した目標は達成されていると思う。評者は実際数ヶ月で「読本篇」を仕上げ、ようやくフィンランド文法のあらましがつかめたのであった。『文法読本』には付属のカセットテープもあり、学習者にやる気さえあれば独習も十分可能である。「文法篇」は参照文法として利用することもできるが、丁寧に全部に目を通し知識の整理に役立ててもいい。

松村(1986)は学びやすいテキストである。全20課を学んでも初級文法の半分程度しか学べないが、読了後の充実感・達成感は大い。同書には最初カセットテープが別売となっていたが、2002年に『CDエクスプレスフィンランド語』としてリニューアルされた。本書終了後に小泉(1983)に移ると学習が容易であろう。

荻島(1992)は初級文法の整理に有益である。ただ、相互に関連のない短文が列挙されているので、単調な学習になることは覚悟しておく必要がある。本書で入門するのではなく、小泉(1983)終了後に取り組むと学習がうまくいくだろう。

栗原・コウリ(2002)はタイトルが胡散臭いが、たしかに一度も挫折することなく読了可能である。ただし、本書で学べることは最初歩の文法と語彙にすぎない。松村(1986)や山川(2013)での入門がうまく行かなかった場合、心機一転フィンランド語に取り組む場合に推奨できる。松村(1986)や山川(2013)で入門に成功した人は、栗原・コウリ(2002)を必ずしも手に取る必要はないだろう。

佐久間(2004a)および佐久間(2004b)は本格的な学習書である。本書で入門し、中級までの実力を一気に身につける方がいるとすれば、その人の忍耐強さには脱帽するほかはない。佐久間(2004b)はもちろん、佐久間(2004a)も、小泉(1983)ないしは荻島(1992)を終了後に、知識の整理・拡充の意味で取り組むとスムーズに行くだろう。そうでないと、荷が重過ぎる。

千葉(2006)は基本的には入門書という形態をとっているが、記述および情報量は本格的なもので、本書も佐久間(2004a)・佐久間(2004b)同様、初級文法終了後に手にすると、むしろ効果的である。千葉(2006)は、2007年からはCD付きで『ゼロか

ら話せるフィンランド語』として流通している。

稲葉(2006)および吉田(2007)は、栗原・コウリ(2002)と同様の書である。ただ、吉田(2007)にはフィンランド語の学習がかなり進んだ段階の人にとっても参考になる記述が多々あるので、中上級者にも一読を勧められる。

吉田(2010)は、小泉(1983)の「文法篇」の記述を充実させたものとして捉えることができる。つまり、レファレンス・ブックとしての利用が考えられるのであるが、「まえがき」(3頁)によると、著者は読者が通読することも望んでいるようだ。情報量が少なくないので、後者としての利用はかなり負担となろう。

吉田(2013)は、入門を終えた学習者にとって、体系的に文法の復習ができる好書である。惜しむらくは、音声資料が付属されていないことである。

山川(2013)は「初心者を対象とした入門書」(3頁)である。全20課から構成される点は松村(1986)と同じであるが、内容的には盛りだくさんで、この一冊で初級文法のかかなりの部分が学習可能となる。それだけに、初心者が本書をマスターするには相当の努力を要するであろう。ところで、本書には喉頭閉鎖音の説明がないにもかかわらず、Tervetulo! や Ole hyvä. に「テルヴェットウロア」(34頁)、「オレツヒュヴァ」(44頁)とカナ表記があるので、初級者は混乱するかもしれない。綴字と発音の乖離について一言説明があればと思う。

読本

荻島(1991)はフィンランドの小学校の教科書から文章を選んで編纂されたものである。荻島(1992)と並行して学習することもできる。読解のための最初歩のテキストとしても有益である。音声資料(カセットテープ)も別売されており、耳からの学習もできる。

スヴァン(1994)は、フィンランドの児童文学者スヴァン(1875-1958年)の短編6作品に訳文と注釈を施したものであり、初級文法を一通り終了した人が取り組むべき理想的な教材に仕上がっている。

会話集

本邦で刊行された4冊はどれも良い本で、甲乙つけがたい。このうち音声教材が別途購入できるのは庄司(1987)だけである。しかし、今世紀に入ってから著された他の3冊は新語を多く含むなど、時代に即応したメリットがある。

語彙集・辞書

残念なことに、用例が豊富で十分な語彙を取めたフィン・和、和・フィン辞典はまだない。所持

すること自体無駄だとは言わないが、価格に見合った情報は得られない。ネットでヘルシンキの Akateeminen kirjakauppa などからフィン英、英フィンの良い辞典が購入できる。これらを和訳・編纂して出版する人がでてほしい。

洋書

日本の洋書店や Amazon.com など容易に入手できる教材として2点を挙げた。どちらにも付属のCD録音が付いている。読みはたいへん自然で、耳に心地よい。Leney (2010) は最初からかなりの速度でテキストが読まれる。Abondolo (2012) は文字通り口語的な表現を多く含んでいる。どちらも推奨に値するテキストである。入門書終了後に組みむと高い効果が得られる。

その他

稲垣 (1981) ・稲垣 (1987) は軽妙洒脱な表現で、著者のフィンランド語と格闘する姿などが語られている。すべての日本人フィンランド語学習者に力を与える必読書である。

吉田 (2008) はフィンランドの言語事情についての研究書である。専門書なので取り組みやすくないが、一読に値する。

以上、本邦のフィンランド語学習書を概観してみた。学習者の増加に伴い、今後は中上級者向けのテキストの刊行が望まれよう。